

公益財団法人 日本習字教育財団

學術研究助成成果論文集

Vol.1

ごあいさつ

公益財団法人 日本習字教育財団は、創立六〇周年ならびに公益法人認可一周年を記念し、二〇一三年より公募による学術研究助成事業を開始し、この度、その成果として『公益財団法人 日本習字教育財団学術研究助成成果論文集 Vol.1』を発行することとなりました。

これは、当財団が公益法人の理念に基づいて、いささかなりとも書道文化・書道教育の振興・発展に寄与したいという、私たちの願いを一つの形にしたものです。多くの人たちと手を携え、今後とも息永く取り組んでいきたいと思えます。

本書の発行にあたり、多くのご指導・ご協力を賜りました審査員・査読委員の先生方をはじめ、関係者の皆さまには心からお礼申し上げます。

二〇一五年 三月二二日

公益財団法人 日本習字教育財団 理事長 甲地史昌

助成研究企画 審査所感

研究助成審査委員長 古谷 稔

日本の伝統文化の一つとして「書」の存在は大きく、古く中国大陸など海外から顕著な影響をうけつつ、日本特有の書文化が形成されました。それらは文学・歴史・仏教・美術ほか、幅広い分野とも関係が深く、現存する中国や日本の「書」の遺品が書道史の視点から見ただけでなく、人文科学を中心とする学術資料としても重要視されています。

第一回の学術研究助成には、現代社会において「書」がいかに大切であるかを認識し、書学書道史や書道教育に関する研究・指導を志向し実践しようとする方々からの応募がありました。「書」の学習は眼で鑑賞し、毛筆や硬筆を手にとって文字を書くことが基本的な方法とされます。また、現存する「書」そのものの研究だけでなく、それらを生み出した要因を当時の日記や記録などの資料によって考察することも重要です。他方、日本の歴史上也見ても明らかのように、宮廷から庶民に至るまで、習字教育が大切にされてきたことも忘れてはなりません。

このたび、第一回学術研究助成の成果として提出された三編の論考および二編の実践研究ノートはいずれも注目すべきものであり、今後にも多々課題を残しながらも、一石を投じた内容であったと思われれます。これらは応募された助成研究企画の中から各領域を担当された先生方の厳正な審査によって助成研究に選定され、かつ査読委員の査読を経て、このたび論文集に採録されたものです。

なお、残念ながら不採用となった研究企画の中にも見るべきものが含まれており、さらに研究企画・研究テーマを深められ、またの機会にぜひ応募していただきたいと念願しております。

査読審査を終えて

査読委員長 大橋修一

このたび、はじめて『公益財団法人 日本習字教育財団 学術研究助成成果論文集』が刊行される運びとなり、五つの研究助成の成果が載録されることとなった。これらは二〇一三年度の第一回助成研究の成果である。二〇一四年度も、第二回学術研究助成の公募を行ったわけである。が、第一回に比べ、応募件数が予想以上に少なく、まだまだ告知・広報面においてさらに力を注がねばならないと痛感した次第である。

さて、第一回助成者の研究成果について、論文集への採録の可、否についても、周到的な推敲が必要な場合は、再度、本人に稿を送り返し、改めて提出をお願いした。ここに採録された論考は、こうした過程を経て、掲載されたものである。論考の掲載方法については、各々論のジャンルが多岐に亘り、内容面からみても、実践レポートや研究ノートの類から論考までと広い領域に及んでいるため、便宜上、本書の形式のようにした。今後はより検討を加え、より見やすいベストな方法を考えてみたい。書の歴史は広汎だけに、未開の領域も、まだまだ多く隠されているように思われる。本論文集の読者には、ぜひ挑戦的な試みを、公益財団法人 日本習字教育財団の学術研究助成制度を活用し、実践してほしいものである。

学術研究助成事業と本書発刊まで経緯

当財団は平成二四年に公益法人としての認可をうけました。このことは、過去における当財団の活動が評価されたと同時に、今後も高い公益性のもとで事業を行うこと、それに伴う社会的責務を果たすことが希求されていることを意味します。公益法人への移行に際し、当財団では新たに「公益財団法人 日本習字教育財団 定款」が策定され、第2章・4条の(5)に書道に関する教育・研究機関への助成を行うことを明確に記しました。本学術研究助成ならびに本書の発行は、この定款に即した事業の一環です。折りしも、平成二五年に当財団は創立六〇周年を迎え、本学術研究助成は、その記念事業としての一面も担うこととなりました。一年以上の準備期間を設け、事業の骨子を定める上で、特に留意したのは以下の点です。

1. 特に若手研究者への助成を目的とし、斯界の未来へ先行投資となるべき助成事業であること。
2. 助成企画の審査員は、すぐれた研究業績を有し、公平性を重んじる良識ある人物であること。
3. 助成研究者の業績となるよう研究成果を査読する。さらに論文集を編集・発行し、広く斯界に情報を発信すること。

ほかにも当然、留意点は数多くありました。2については、幸運にも東京国立博物館名誉館員の古谷稔先生に審査委員長をお引き受けいただき、さらに各分野の優れた研究者に審査員としてご協力いただきました。3については、埼玉大学の大橋修一先生を中心に、研究成果の査読を行いました。また、本書の刊行に先立ち、審査委員・査読委員の先生方にお集まり頂き、助成成果の査読方針をはじめ多岐にわたる種々の問題について、細部まで議論が重ねられました。

しかしながら、如何せん新規事業のため、突発的対応を迫られる状況も数多くありました。助成対象者のみなさまには、心よりお詫び申し上げます。

願わくは、本学術研究助成事業とその成果である本書が、江湖に受け入れられんことを。

目次

ごあいさつ	公益財団法人 日本習字教育財団 理事長	甲地 史昌
助成研究企画 審査所感	研究助成審査委員長	古谷 稔
査読審査を終えて	査読委員長	大橋 修一
学術研究助成事業と本書発刊までの経緯		

〈論考〉

伝梁武帝筆「異趣帖」の伝本系統について	下田 章平	8
江戸時代日記史料にみる近世宮廷社会の古書跡の諸相	高田 智仁	44
近代習字教科書の書式教材	清水 文博	81

〈実践研究ノート〉

書写における点画概念の理解と書字リズムの習得について — 小筆の特性を生かした学習の再構築 —	谷口 邦彦	106
成人知的障がい者の書道活動 「生涯学習としてのより良い支援法をめざして」	藤田 万里子	136

英文タイトル

研究助成審査員一覧